

1年2組

基地づくりを通して ～新たな自分や仲間の一面との出会い～



基地づくりへの挑戦

1年2組では、7月から基地づくりを行っています。基地づくりをする場所の草取りから始まり、地面を平らにすること、柱を立てる場所に穴を掘ることなど、地道な作業を子どもたちなりに粘り強く取り組み、ついに着工するところまできました。保護者の方々にご協力いただき、子どもたちと共に基地づくりや釘打ちとノコギリの練習を行いました。具体的な形が見えてきたことで子どもたちの期待もより高まっていることを感じます。



新たな自分や仲間の一面に出合い、気付く子どもたち

10月、壁板となる板を鋸で切る活動を行いました。班ごと場所を確保し、道具を用意して活動を行っていました。この活動をこれまでに5回行ってきました。最初は、班で2枚の板を切るということを、どのように行うのかこちらが説明しながら、2時間で何とか1枚の板を切り終えるのが精一杯でした。今では、「場所を班ごと確保する」「板を運ぶ」「道具を用意する」「班で2枚の板を切る」「片付ける」という一連の活動を自分たちで行えるまでになりました。以前は1枚の板を切るのに2時間かかっていた子どもたちですが今では、1時間の授業ですべて行えるまでになりました。一番早い班では、30分程度で片付けまで完了できるようになってきました。1回目と5回目との子どもたちの活動の様子を比較すると大きな成長を感じます。



壁板を鋸で切っている様子



壁板を鋸で切っている様子



Aさんが切った板の断面

5回目の板を切る活動の中で、「Aくんは、鋸のプロなんだよ。」「切るのすごく上手なんだよ。」と、まるで自分のことのように嬉しそうに語るBさんの姿がありました。壁となる板を切る活動を班の仲間と繰り返し行う中で、Aさんの新たな一面に出合ったBさんの誇らしげな笑顔がそこにはありました。Bさんの誇らしげな表情には、これほどまでに鋸を上手に扱うAさんと同じ班であることが誇らしくなったからだと思います。だから、自分のことのように嬉しそうに語ったのだと思います。また、Bさんが、Aさんのすごさに気付けたのは、Bさん自身も板を切るという同じ経験を積んできたからです。Bさん自身も何度も板を切っています。だから板を切る難しさや大変さを知っています。だからこそ、Aさんが素早く板を切っていく姿に驚きを隠せずにいられなかつたのでしょうか。もし、Bさん自身が板を切るという経験をしていなかつたら、きっとここまで驚きと喜びに結びついてはいなかつたのではないかでしょうか。経験しているからこそ見えたAさんのすごさだったのでした。切った板の断面を見るとすごく滑らかでした。「切ったところの板を触ってごらん」と私が促すとBさんは、実際に切った断面を触りながら、「すべすべしている!」とまた新たな発見に喜びを表現する姿がありました。

今回、板を切るという活動を5回行ってきました。板を切るという同じものに何度も働きかけていくことで自分たちの成長を実感していく瞬間でした。私自身子どもたちと共に活動する中で、子どもたちの鋸をもって構える姿や板を切る音が途絶えることなく連続して響くようになってきたことに成長を感じています。仲間のよさにも目を向け始めている姿から仲間との絆も育まれてきていることを実感する瞬間でもありました。

11月、十分な数の壁板が揃ったので、基地の壁づくりを始めました。壁は、金槌で釘を打ちつけます。また、新たな道具との出会いです。以前に保護者の方に見守っていただきながら練習をしましたが、実際に基地へ釘を打つのは初めてのことでした。子どもたちは、最初なかなか釘が板に刺さらないことで苦戦しました。釘を板に打ち付けるのに苦労するではなく、釘の先が板に刺さらないのです。「先生、釘が入らない」「先生助けて」と声をかけられることもあ

りました。私は、子どもたちに範を示しながら、金槌を持つ位置や構える位置、金槌を動かす速さなど1つ1つ確認しました。子どもたちは繰り返し作業する中で段々と身体でコツを掴んでいきました。今では、作業が始まると「コンコンコン…」と小気味よいリズムの金槌の音が基地いっぱいに広がります。それでも、まだまだ1年生です。上手くいかない時もあります。釘が曲がってしまったり、釘を打ち進められなかったりすることもあります。しかし、以前に比べると「先生入らないよ」「先生助けて」を言う前に自分で何とかできないだろうかと子どもたちなりに真剣に釘を見つめ、粘り強く取り組もうとする姿も少しずつ広がってきています。

Cさんは2時間目の休み時間に基地づくりの準備をしている私のところへ来て、「先生、釘打ちの練習がしたい」とお願いをしに来ました。そこで、私が見守る中、Cさんの釘打ちの練習が始まりました。言葉には、しないもののCさんは釘を打ちながら、「どうしたら上手に釘が打てるのか」と思考を巡らせていました。釘を2本ほど打ち終えたころ、2時間目休みの終わりを告げる音楽が鳴り、いよいよ3時間目の基地づくりが始まりました。Cさんは、班の仲間と壁板を運び、早速、釘を打ち始めます。しかし、最初の打ち始めがうまくいきません。「先生、最初だけお願ひ」と言うので、最初の打ち始めだけお手伝いしました。私の釘を打つ様子を見ながら、「先生、そこまで大丈夫。そこから先はできそう。」と言いました。そこから、Cさんの釘打ちが始まりました。「コンコンコン…」と小気味よい音が鳴り出します。そして、ついに釘が最後まで入りました。すると、Cさんは、「先生、見て。釘打てたよ。」と満面の笑みを浮かべています。その後、Cさんは、再び壁板を運んで、釘打ちを行います。今度は最初から最後まで釘を打ち終えることができました。すると、「練習の成果かな」とつぶやきました。この「練習の成果かな」という言葉と釘を打ち終えた後の笑顔の背景には、釘が打てた私と出会った喜びがあったように感じます。「釘を上手に打てるようになりたい」と願ったCさんが、「上手に打てるようになるために練習しよう」と考え、練習をし、実際に釘打ちができた新たなCさんとCさん自身とが出会った瞬間だったように感じます。その様子を見守っていた私も自分事のように嬉しくなりました。この釘打ちに限らず、基地づくりをはじめ毎日の学校生活を通して、子どもたちは一人ひとりが新たな自分と出会っているように日々感じています。基地づくりを通して、子どもたちが、新たな自分と出会い、自信へとつながっていく。この活動だけにとどまらず、くらしの中でも自信につなげていきたいと願う毎日です。

12月、壁板の取り付けを概ね終えることができ、床板の取り付けを行うことができました。床の大きさに合わせて板を切り、はめ込んでいき、トンカチで釘を打ち付けるという作業工程でした。子どもたちは、床板に沿って列になり、はめられた板に釘を打ち付けていました。基地づくりが始まった当初は、慣れない手つきであった釘打ちも今では、自分たちでどんどんと打ち込んでいくことができます。釘を打ち付ける子どもたちの後ろ姿からは、自信とたくましささえ感じます。次々に、床板が取り付けられていきます。基地の中は壁と屋根とで囲まれていたこともあるってか、釘を打つ音が響き合ってとても迫力のある音となっていました。子どもたち一人ひとりが釘を打つ音が、重なり合い大きな響きとなっていました。音と音とが手を取り合い響き合いを創っていくかのようです。音の重なりと共に子どもたちの気持ちも1つになっていくことを感じる瞬間でもありました。釘を打つ音は、子どもたちの完成への期待感や胸の高鳴りを表しているかのようでした。「わたしたちの基地が出来上がるぞ」「ぼくたちの基地はこれなのだ」等という思いが注がれています。

床板を張り終えていくと、子どもたちは口々に、「ちゃんと床になったね」「裸足でも入れそう」「釘で打ったから裸足とか靴下は危ないよ」「でも外靴ではないよね」「上履きならいいんじゃない。安全だしいいじゃん。」「いいね。いいね。」などといったやり取りが沸き起こり、教室からほうきと塵取りを持ち出して、自然と掃除が始まってきました。この日から、子どもたちは、床をきれいにしたいという思いで、毎日のように床掃除を行っています。できあがった床板を目の前にした子どもたちは、「外」とは異なる室内という空間に、特別感が芽生えたようでした。そして、特別な空間だからこそ友と共に過ごしたい場所になったように感じられました。「基地の中で遊びたい」「基地で給食を食べたい」など、基地でやってみたい活動も生まれてきました。休み時間になると子どもたちからは、「基地へ行こう」「基地で遊ぼう」という声がよく聞かれるようになり、子どもたちの交流の場ができあがってきています。



壁板を打ち付けている様子①



壁板を打ち付けている様子②



床板に釘を打ち付けている様子



床をきれいにしている様子